

「道の駅」を防災拠点に

イノシシ捕獲、被害前でも許可



2月県議会は28日、一般質問が行われ、自民党の関政幸（千葉市緑区）、山本義一（八街市）、今井勝（我孫子市）、民主党の中田学（柏市）、公明党の横山秀明（八千代市）の5議員が登壇した。県は、大規模災害時の防災拠点として、県内に22カ所ある「道の駅」の活用を検討することを明らかにした。また、農作物の被害が拡大しているイノシシについて、新年度から被害発生前でも捕獲を許可する方針を示した。（答弁要旨2面）

道の駅は幹線道路沿いには、広い駐車場スペースを備える道の駅が避難住民の休憩や食事に使われ、地元産品の直売所としても人気を集めている。東日本大震災や新潟県中越地震では、広い駐車場スペースを備える道の駅が避難住民の活動拠点として機能した。こうした状況を踏まえ、中田議員は道の駅の防災活用の見通しについて質問。

岩館和彦防災危機管理監は「道の駅の活用は災害応急対策として非常に有効」と述べ、県内22の道の駅で組

織する県ブロック連絡会と協議していく方針を示した。今後は、他県の先行事例を研究し、市町村とも連携しながら具体的な防災機能を検討する。

一方、山本議員は「イノシシの生息域が県南部から八街や東金市などに広がり、2007～10年度の農作物被害は毎年1億7千万円前後に上っている」と指摘。戸谷久子環境生活部長は「被害防止には生息場所の早期発見と早期捕獲

が重要」との認識を示し、4月から捕獲の許可要件を緩和する方針を明らかにした。

イノシシの捕獲について、県は原則、被害を受けてから捕獲の許可を出していたが、今後は県が市町村に対して提供する生息情報に基づき、被害発生前でも捕獲を許可する。県自然保護課は「捕獲の手続きを簡素化することで、農作物被害の拡大に歯止めをかけた」としている。